

abc 予想入門

小野寺一浩

千葉工業大学

2022 年 10 月 15 日

1 abc 予想

- 概略
- 定式化
- 正しいか?
- 同値な言い換え

2 abc 予想の応用

- Fermat の最終定理
- Siegel の定理
- Erdos-Mollin-Walsh 予想
- Roth の定理
- Faltings の定理 (Mordell 予想)
- 数論的力学系

3 abc 予想の起源

4 知られている事実

5 abc 予想の改良

§1.1 abc 予想：概略

abc 予想

「かけ算」と「たし算」の間にある奥深い規則性を見出して定式化したもの

本講演では、まず 3 個の自然数 a, b, c に対して、

ある種の「かけ算的性質」と「たし算的性質： $a + b = c$ 」

が両立しづらいことを確認する。

その後で、abc 予想により、そのような現象を見通し良く理解出来ることを説明する。

両立しづらい例 1

定理 1 (Fermat の最終定理 (Wiles, 1995))

n を 3 以上の整数とする. 自然数 x, y, z で

$$x^n + y^n = z^n$$

を満たすものは存在しない.

※ $n = 2$ のときは無数に解をもつ. (cf. ピタゴラス数)

要するに, 3 個の自然数 a, b, c に対して

「かけ算的性質: n 乗数 ($n \geq 3$)」と「たし算的性質: $a + b = c$ 」

は両立しない.

例 3 乗数の列 1, 8, 27, 64, 125, 216, 343, 512, 729, 1000, ...

から $a + b = c$ を満たす組 (a, b, c) を見つけることはできない.

両立しづらい例 2

「かけ算的性質」 = 「2,3,5 以外の素因数を持たない」... (*)

例 (*) を満たす自然数：

1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 15, 16, 18, 20, 24, 25, 27, 30, 32, 36,
40, 45, 48, 50, 54, 60, 64, 72, 75, 80, 81, 90, 96, 100, 108, 120, 125,
128, 135, 144, 150, 160, 162, 180, 192, 200, 216, 225, 240, 243, 250,
256, 270, 288, 300, 320, 324, 360, 375, 384, 400, 405, ...

問題

上の数列から $a + b = c$ を満たす互いに素な自然数の組 (a, b, c) をどれ位見つけることが出来るか？ただし, a, b, c が互いに素であるとは, a, b, c が共通の約数 (> 1) を持たないことをいう。

【注意】条件「互いに素」を課しないと, 一つの組から無数の組が簡単に構成できてしまう. 例えば, $(1, 2, 3) \rightarrow (n, 2n, 3n)$ (n は (*) を満たす自然数)

定理 2 (Siegel の結果 (1921) の一例)

次の 2 条件を満たす互いに素な自然数の組 (a, b, c) は有限個しかない.

(1) [かけ算的性質] a, b, c が $(*)$ を満たす

(2) [たし算的性質] $a + b = c$

例 条件を満たす組 (a, b, c) ($a \leq b$):

$(1, 1, 2), (1, 2, 3), (1, 3, 4), (1, 4, 5), (2, 3, 5), (1, 5, 6),$
 $(3, 5, 8), (1, 8, 9), (4, 5, 9), (1, 9, 10), (1, 15, 16), (1, 24, 25),$
 $(9, 16, 25), (2, 25, 27), (5, 27, 32), (1, 80, 81), (3, 125, 128)$

「たし算的性質： $a + b = c$ 」と両立しづらい「かけ算的性質」の例：

- 1 n 乗数 ($n \geq 3$)
- 2 2, 3, 5 以外の素因数を持たない

この2種類の「かけ算的性質」は、一見異なるように思える。



しかし、それらの背後にはある共通した性質があり、それが原因で両立しづらくなっている。

abc 予想は、その事実を見通し良く説明してくれる。

§1.2 abc 予想の定式化

定義 (根基)

自然数 n の根基 (radical) を $\text{rad}(n)$ で表し、次で定義する：

- $\text{rad}(1) := 1$
- 2 以上の整数 n に対しては $n = p_1^{e_1} p_2^{e_2} \cdots p_r^{e_r}$ と素数分解できるとき

$$\text{rad}(n) := p_1 p_2 \cdots p_r$$

要するに、 $\text{rad}(n)$ は n の素因数の積である。

例 $\text{rad}(8) = \text{rad}(2^3) = 2$

$$\text{rad}(10) = \text{rad}(2 \cdot 5) = 2 \cdot 5 = 10$$

$$\text{rad}(12) = \text{rad}(2^2 \cdot 3) = 2 \cdot 3 = 6$$

$$\text{rad}(36) = \text{rad}(2^2 \cdot 3^2) = 2 \cdot 3 = 6$$

abc-triple とは, $a + b = c$ を満たす互いに素な自然数の組 (a, b, c) のこと

予想 1 (abc 予想 (Oesterlé-Masser, 1985))

ε を任意の正の数とする. このとき, abc-triple (a, b, c) は, 有限個の例外を除いて,

$$c < \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon} \quad (1)$$

を満たす.

※不等式 (1) は

「足し算的性質: $a + b = c$ 」と「かけ算的対象: rad 」

の間にある規則性を表現している

【補足】

2012 年に望月新一教授が証明を発表

2020 年に論文が査読を通過

2021 年に論文が雑誌に掲載

例

$\varepsilon = 0.2, 0.4, 0.6, 0.8, 1.0$ に対して, abc-triple (a, b, c) で

$$c < \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon} \quad \left(\Leftrightarrow q = q(a, b, c) := \frac{\log c}{\log \text{rad}(abc)} < 1 + \varepsilon \right)$$

を満たす例 (○) と満たさない例 (×) :

a	b	c	0.2	0.4	0.6	0.8	1.0	q
1	2	3	○	○	○	○	○	0.6131
2	5^2	3^3	○	○	○	○	○	0.9690
2^2	11^2	5^3	○	○	○	○	○	1.0272
3^2	$2^8 \cdot 61$	5^6	×	○	○	○	○	1.2855
$2^{10} \cdot 7$	5^7	$2 \cdot 3^{13} \cdot 47^2$	×	×	○	○	○	1.4362
1	$2 \cdot 3^7$	$5^4 \cdot 7$	×	×	○	○	○	1.5679
2	$3^{10} \cdot 109$	23^5	×	×	×	○	○	1.6299

abc 予想の意味 (一つの側面)

準備として、まず次の命題を示す.

命題 1

$c < \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$ を満たす abc-triple (a, b, c) に対して、次が成り立つ:

$$\frac{a}{\{\text{rad}(a)\}^{3(1+\varepsilon)}} \cdot \frac{b}{\{\text{rad}(b)\}^{3(1+\varepsilon)}} \cdot \frac{c}{\{\text{rad}(c)\}^{3(1+\varepsilon)}} < 1.$$

つまり、「(左辺) ≥ 1 」を満たす abc-triple は、abc 予想の例外である.

【証明】以下の二つの事実から、直ちに従う.

- $a < c, b < c$ より $abc < c^3 < \{\text{rad}(abc)\}^{3(1+\varepsilon)}$
- a, b, c はどの二つも互いに素だから $\text{rad}(abc) = \text{rad}(a) \text{rad}(b) \text{rad}(c)$ \square

命題 1 から分かる「abc 予想の意味」

自然数 a, b, c が次のような性質を満たすとする：

「自然数 m に対して $\frac{m}{\{\text{rad}(m)\}^{3(1+\varepsilon)}} \geq 1$ が起こりやすい性質」 \dots (*)

→ $\frac{a}{\{\text{rad}(a)\}^{3(1+\varepsilon)}} \cdot \frac{b}{\{\text{rad}(b)\}^{3(1+\varepsilon)}} \cdot \frac{c}{\{\text{rad}(c)\}^{3(1+\varepsilon)}} \geq 1$ になりやすい

→ 仮に (a, b, c) が abc-triple ならば、それは abc 予想の例外になりやすい

→ abc 予想の例外は有限個だから、 (a, b, c) は abc-triple になりづらい

→ 性質 (*) は「たし算的性質： $a + b = c$ 」との両立が難しい。

性質 (*) の例 先ほど扱った二つの「かけ算的性質」があげられる：

1 n 乗数 ($n \geq 3$) ($n = 3$ の場合は微妙?)

2 2, 3, 5 以外の素因数を持たない

§1.3 abc 予想は正しいか? (数値計算による分析)

表 1: $q = (\log c) / \{\log \text{rad}(abc)\}$ ($a < b$)

	$q > 1$	$q > 1.05$	$q > 1.1$	$q > 1.2$	$q > 1.3$	$q > 1.4$
$c < 10^2$	6	4	4	2	0	0
$c < 10^3$	31	17	14	8	3	1
$c < 10^4$	120	74	50	22	8	3
$c < 10^5$	418	240	152	51	13	6
$c < 10^6$	1,268	667	379	102	29	11
$c < 10^7$	3,499	1,669	856	210	60	17
$c < 10^8$	8,987	3,869	1,801	384	98	25
$c < 10^9$	22,316	8,742	3,693	706	144	34
$c < 10^{10}$	51,677	18,233	7,035	1,159	218	51
$c < 10^{11}$	116,978	37,612	13,266	1,947	327	64
$c < 10^{12}$	252,856	73,714	23,773	3,028	455	74
$c < 10^{13}$	528,274	139,762	41,438	4,519	599	84
$c < 10^{14}$	1,055,541	258,146	70,047	6,665	769	98
$c < 10^{15}$	1,880,836	446,903	114,712	9,497	998	112
$c < 10^{16}$	3,055,163	700,263	175,134	13,116	1,232	126
$c < 10^{17}$	4,685,632	1,024,027	247,237	17,576	1,530	143
$c < 10^{18}$	6,619,318	1,379,207	321,371	21,890	1,822	160

表 2 : $q = (\log c) / \{\log \text{rad}(abc)\}$ が大きい abc-triple
 知られている中でのベスト 10 ($a < b$)

	a	b	c	q
1	2	$3^{10} \cdot 109$	23^5	1.62991
2	11^2	$3^2 \cdot 5^6 \cdot 7^3$	$2^{21} \cdot 23$	1.62599
3	$19 \cdot 1307$	$7 \cdot 29^2 \cdot 31^8$	$2^8 \cdot 3^{22} \cdot 5^4$	1.62349
4	283	$5^{11} \cdot 13^2$	$2^8 \cdot 3^8 \cdot 17^3$	1.58076
5	1	$2 \cdot 3^7$	$5^4 \cdot 7$	1.56789
6	7^3	3^{10}	$2^{11} \cdot 29$	1.54708
7	$7^2 \cdot 41^2 \cdot 311^3$	$11^{16} \cdot 13^2 \cdot 79$	$2 \cdot 3^3 \cdot 5^{23} \cdot 953$	1.54443
8	5^3	$2^9 \cdot 3^{17} \cdot 13^2$	$11^5 \cdot 17 \cdot 31^3 \cdot 137$	1.53671
9	$13 \cdot 19^6$	$2^{30} \cdot 5$	$3^{13} \cdot 11^2 \cdot 31$	1.52700
10	$3^{18} \cdot 23 \cdot 2269$	$17^3 \cdot 29 \cdot 31^8$	$2^{10} \cdot 5^2 \cdot 7^{15}$	1.52216

引用元：

表 1 は "Synthese resultaten" rekenmeemetabc.nl.

表 2 は Nitaj, The abc conjecture home page.

数値計算からの分析 (私見) :

- 1 任意の $\varepsilon > 0$ に対して, $c \geq \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$ を満たすような例外的な abc-triple の (ある種の) 密度は 0 になりそう. 例えば,

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{\#\{c \leq x \mid \text{例外的な abc-triple } (a, b, c) \text{ が存在する}\}}{x} = 0 \quad (2)$$

が成り立ちそう.

しかし, 例外が有限組しかないかどうかは正直予想できない.

- 2 ε がある一定数より大きければ, 例外はなさそう.

前者について

- (2) は比較的容易に証明できる.
- 例外の有限性を期待できる「確率的な発見的方法」は知られている.
(ref. せきゅーん, INTEGERS, Q&ABC (その 5))

後者について 例えば, 次の予想が広く知られている.

予想 2 (abc 予想 (簡潔版))

全ての abc-triple に対して, 次が成立する:

$$c < \{\text{rad}(abc)\}^2$$

【注意】 予想 1, 2 は, それぞれ「弱い abc 予想」, 「強い abc 予想」と呼ばれることがあるが, 論理的な強弱関係はない (少なくとも現時点では知られていない). また, 予想 2 は現時点では未解決である.

§1.4 abc 予想の同値な言い換え

予想 1 (abc 予想 [再掲])

ε を任意の正の数とする. このとき, abc-triple (a, b, c) は, 有限個の例外を除いて, 次を満たす:

$$c < \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$$

予想 1 は次の予想と同値である:

予想 3 (abc 予想 (不等式調整版))

ε を任意の正数とする. このとき, 全ての abc-triple に対して

$$c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$$

が成り立つような定数 $K_\varepsilon \geq 1$ が存在する.

予想 2(abc 予想 (簡潔版)) は, $\varepsilon = 1$ のとき $K_\varepsilon = 1$ であることを主張する.

【同値性の証明】 予想 1 \Rightarrow 予想 3

(i) 例外的な abc-triple がない ε に対しては $K_\varepsilon = 1$ とすれば良い.

(ii) 例外的な abc-triple がある ε に対しては, その有限組を

$$(a_1, b_1, c_1), (a_2, b_2, c_2), \dots, (a_n, b_n, c_n)$$

とする: $c_i \geq \{\text{rad}(a_i b_i c_i)\}^{1+\varepsilon}$ ($i = 1, 2, \dots, n$). ここで

$$1 \leq \max_{1 \leq i \leq n} \frac{c_i}{\{\text{rad}(a_i b_i c_i)\}^{1+\varepsilon}} < K_\varepsilon$$

を満たすような $K_\varepsilon > 1$ を選べば,

$$c_i < K_\varepsilon \{\text{rad}(a_i b_i c_i)\}^{1+\varepsilon} \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

が成り立つ. 一方, 例外でない abc-triple (a, b, c) に対しても

$$c < \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon} < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$$

が成り立つ. 故に, 予想 3 が成り立つ.

予想 3 \Rightarrow 予想 1

(a, b, c) を例外的な abc-triple とする： $c \geq \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon} \dots (*)$

$0 < \varepsilon' < \varepsilon$ なる ε' を一つ選ぶ. 予想 3 より

$$c < K_{\varepsilon'} \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon'}$$

が成り立つような $K_{\varepsilon'} \geq 1$ が存在する. よって

$$\begin{aligned} c^{1+\varepsilon} &< K_{\varepsilon'}^{1+\varepsilon} \{\text{rad}(abc)\}^{(1+\varepsilon)(1+\varepsilon')} \\ &\leq K_{\varepsilon'}^{1+\varepsilon} c^{1+\varepsilon'} \quad (\because (*)) \end{aligned}$$

$$c^{\varepsilon-\varepsilon'} < K_{\varepsilon'}^{1+\varepsilon}$$

$$c < K_{\varepsilon'}^{(1+\varepsilon)/(\varepsilon-\varepsilon')}$$

従って, c の取り得る値は有限個である. $a + b = c$ より, a, b の取り得る値も有限個だから, 例外的な abc-triple も有限個である.

故に, 予想 1 が成り立つ. □

§1.5 補足

補足 1

abc-triple とは, $a + b = c$ を満たす互いに素な自然数の組 (a, b, c) のこと.
ここで, 条件「互いに素」は必要である.

仮にこの条件を外してしまうと, abc 予想の例外が無数に現れてしまう.

例えば, $(a, b, c) = (1 \cdot 3^k, 2 \cdot 3^k, 3 \cdot 3^k)$ (k は自然数) は,
 $a + b = c$ を満たす互いに素でない組である. 一方,

$$c = 3^{k+1}, \quad \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon} = 6^{1+\varepsilon}$$

だから, 十分大きな k に対して常に $c \geq \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$ を満たす.

また, 上記の (a, b, c) たちに対して

$c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$ が成り立つような定数 $K_\varepsilon \geq 1$ も存在しない.

補足 2

$\varepsilon = 0$ の場合の不等式 $c < \text{rad}(abc)$ を満たさない abc-triple は無数にある。

例えば, abc-triple $(a, b, c) = (3^{2^r} - 1, 1, 3^{2^r})$ ($r = 1, 2, 3, \dots$). 実際,

$$\begin{aligned} 3^{2^r} - 1 &= (3^{2^{r-1}})^2 - 1^2 = (3^{2^{r-1}} + 1)(3^{2^{r-1}} - 1) \\ &= (3^{2^{r-1}} + 1)(3^{2^{r-2}} + 1)(3^{2^{r-2}} - 1) \\ &\dots \\ &= \underbrace{(3^{2^{r-1}} + 1)(3^{2^{r-2}} + 1) \cdots (3^2 + 1)(3 + 1)(3 - 1)}_{r+1 \text{ 個の値の積}} \end{aligned}$$

各因数は偶数であり, また $3+1=4$ に注意すると, $3^{2^r} - 1$ は 2^{r+2} で割り切れるので

$$\begin{aligned} \text{rad}(abc) &= \text{rad}((3^{2^r} - 1)3^{2^r}) = \text{rad}\left(2 \cdot \frac{3^{2^r} - 1}{2^{r+2}} \cdot 3\right) \\ &\leq 2 \cdot \frac{3^{2^r} - 1}{2^{r+2}} \cdot 3 < \frac{3}{2^{r+1}} c < c. \end{aligned}$$

また, 上記の (a, b, c) たちに対して

$c < K_0 \text{rad}(abc)$ が成り立つような定数 $K_0 \geq 1$ も存在しない。

§2.1 応用：Fermat の最終定理

定理 3 (「Fermat の最終定理」への応用)

ある $\varepsilon > 0$ に対して、全ての abc-triple (a, b, c) が

$$c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$$

を満たすような定数 $K_\varepsilon \geq 1$ が存在するならば、

Fermat 方程式 $x^n + y^n = z^n$ について、以下が成り立つ：

- (1) $n > 3(1 + \varepsilon)$ のとき、互いに素な解の個数は有限個である。
- (2) 特に、 $n \geq 3(1 + \varepsilon) + \log_2 K_\varepsilon$ のとき、解は存在しない。

【注意】 Fermat 方程式の解 (x, y, z) に対して、共通の約数 $d > 1$ があれば $(x/d, y/d, z/d)$ も解である。従って、互いに素な解が本質的である。

系 1

abc 予想 (予想 1 or 3) が正しいなら, $x^n + y^n = z^n$ について次が成り立つ:

- (1) $n \geq 3$ のとき, 互いに素な解の個数は有限個である.
- (2) 十分大きな n に対して, 解は存在しない.

【証明】 (1) 任意の $\varepsilon > 0$ に対して定理 3 の仮定を満たすから, $n > 3$ のときは正しい. $n = 3$ のときは, Euler により解が存在しないことが知られている. (2) 定理 3 より明らか. □

系 2

簡潔版 abc 予想 (予想 2) が正しいなら 「Fermat の最終定理」 が成立する.

【証明】 定理 3 (2) より, $x^n + y^n = z^n$ ($n \geq 6$) は解を持たない.

$n = 3, 4, 5$ のとき解を持たないことは, 既に知られている.

($n = 3$: Euler, $n = 4$: Fermat, $n = 5$: Germain, Dirichlet, Legendre)

補足

Mochizuki(2021) : 系 1 の結果は得られる.

K_ε の大きさは不明のため, 「Fermat の最終定理」は得られない.

Mochizuki-Fesenko-Hoshi-Minamide-Porowski(2022) :

K_ε ($\varepsilon > 0.5$) の大きさを具体的に評価することに成功した.

様々の先行研究と組み合わせることで, 「Fermat の最終定理」に対して, Wiles のものとは異なる別証明を与えた.

更に, 「一般化された Fermat 方程式」について次の結果を得た:

定理 4

r, s, t は, どの二つも互いに素な整数とする. l, m, n は,

$$\min\{l, m, n\} > \max\{2.453 \times 10^{30}, \log_2 |rst|, 10 + 5 \log_2(\text{rad}(rst))\}$$

を満たす自然数とする. このとき, 方程式 $rx^l + sy^m = tz^n$ を満たす互いに素な自然数解 (x, y, z) ($\neq (1, 1, 1)$) は存在しない.

定理 3 の証明

(1) 互いに素な組 (x, y, z) が Fermat 方程式 $x^n + y^n = z^n$ を満たすとする。
このとき、 (x^n, y^n, z^n) は abc-triple であるから

$$\begin{aligned} z^n &< K_\varepsilon \{\text{rad}(x^n y^n z^n)\}^{1+\varepsilon} \\ &= K_\varepsilon \{\text{rad}(xyz)\}^{1+\varepsilon} \quad (\because \text{rad}(a^n) = \text{rad}(a)) \\ &\leq K_\varepsilon (xyz)^{1+\varepsilon} \quad (\because \text{rad}(a) \leq a) \\ &< K_\varepsilon z^{3(1+\varepsilon)} \quad (\because x < z, y < z) \end{aligned}$$

$$\therefore z^{n-3(1+\varepsilon)} < K_\varepsilon$$

仮定より $n - 3(1 + \varepsilon) > 0$ だから、 $z < K_\varepsilon^{\frac{1}{n-3(1+\varepsilon)}}$ である。

従って、条件を満たす z は有限個である。

$x < z, y < z$ だから、条件を満たす組 (x, y, z) は有限個である。

(2) $n \geq 3(1 + \varepsilon) + \log_2 K_\varepsilon$ ($\cdots (*)$) のときを考える.

背理法で示すため,

「Fermat 方程式 $x^n + y^n = z^n$ を満たす互いに素な組 (x, y, z) が存在する」と仮定する. このとき, (1) と同様にして

$$z^{n-3(1+\varepsilon)} < K_\varepsilon$$

が成り立つ. $n \geq 3(1 + \varepsilon)$ と $2 \leq z$ より

$$2^{n-3(1+\varepsilon)} \leq z^{n-3(1+\varepsilon)} < K_\varepsilon$$

だから, $n - 3(1 + \varepsilon) < \log_2 K_\varepsilon$ である. これは $(*)$ に矛盾する.

故に, $n \geq 3(1 + \varepsilon) + \log_2 K_\varepsilon$ のとき, $x^n + y^n = z^n$ の解は存在しない. \square

§2.2 応用：Siegel の定理

$S = \{p_1, p_2, \dots, p_s\}$ を有限個の素数の集合とする.

自然数 n が **S -単数**であるとは、 n が p_1, p_2, \dots, p_s 以外の素因数を持たないときにいう.

定理 5 (Siegel, 1921)

$a + b = c$ を満たすような互いに素な S -単数の組 (a, b, c) は有限個しかない.

【abc 予想を用いた証明】条件を満たす組 (a, b, c) は abc-triple だから、ある $\varepsilon > 0$ と $K_\varepsilon \geq 1$ が存在して、

$$c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon} \leq K_\varepsilon (p_1 p_2 \cdots p_s)^{1+\varepsilon}$$

が成り立つ. よって、条件を満たす c は有限個である.

$a < c, b < c$ より、条件を満たす (a, b, c) は有限個である. □

§2.3 応用：Erdős-Mollin-Walsh 予想

多冪数 …素因数分解したときの各素因数の指数が全て 2 以上となる自然数

例 $4 = 2^2$, $8 = 2^3$, $9 = 3^2$, $16 = 2^4$, $25 = 5^2$, $27 = 3^3$, $32 = 2^5$, $36 = 2^2 \cdot 3^2$

予想 4 (Erdős(1976), Mollin-Walsh(1986))

3 連続する多冪数は存在しない。

定理 6

ある $\varepsilon < 1/3$ に対して, 全ての abc-triple (a, b, c) が

$$c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$$

を満たす定数 $K_\varepsilon \geq 1$ が存在するならば, 3 連続する多冪数は有限個である。

【補足】 2 連続する多冪数は無数に存在する。

例えば, $x_n + y_n\sqrt{2} = (3 + 2\sqrt{2})^n$ (n は自然数) とおくと,
 $2^3 x_n^2 y_n^2, (x_n^2 + 2y_n^2)^2$ は 2 連続する多冪数である。

【定理 6 の証明】

3 連続する自然数 $n - 1, n, n + 1$ が多冪数であるとする.

このとき, $(n^2 - 1, 1, n^2)$ は abc-triple だから

$$\begin{aligned}n^2 &< K_\varepsilon \{\text{rad}(n^2(n^2 - 1))\}^{1+\varepsilon} \\&= K_\varepsilon \{\text{rad}(n(n - 1)(n + 1))\}^{1+\varepsilon} \\&\leq K_\varepsilon \{\sqrt{n(n - 1)(n + 1)}\}^{1+\varepsilon} \\&\quad (\because a \text{ が多冪数ならば } \{\text{rad}(a)\}^2 \leq a) \\&= K_\varepsilon \{\sqrt{n(n^2 - 1)}\}^{1+\varepsilon} \\&< K_\varepsilon n^{\frac{3}{2}(1+\varepsilon)}.\end{aligned}$$

従って, $n^{\frac{1}{2}(1-3\varepsilon)} < K_\varepsilon$, つまり $n < K_\varepsilon^{\frac{2}{1-3\varepsilon}}$ が成り立つ.

故に, 条件を満たす n は有限個しかない. □

§2.4 応用：Roth の定理

代数的無理数 … ある整数係数多項式の解となるような無理数

例 $\sqrt{2}$, $\sqrt{3}$, $\sqrt[4]{5}$ は代数的無理数 ($\log 2$, $\log 3$, e , π はそうではない)

1994 年に Bombieri は, abc 予想から次の定理 (の精密版) を示した.

定理 7 (Roth, 1955 → フィールズ賞 (1958))

$\varepsilon > 0$ とし, α を代数的無理数とする. このとき

$$\left| \alpha - \frac{p}{q} \right| < \frac{1}{q^{2+\varepsilon}}$$

を満たす既約分数 p/q ($q > 0$) は有限個しかない.

§2.5 応用：Faltings の定理 (Mordell 予想)

1991 年に Elkies は, abc 予想から次の定理を示した.

定理 8 (Faltings, 1983 → **フィールズ賞** (1986))

有理数係数の 2 変数数多項式 $f(x, y)$ に対して, 曲面 $f(x, y) = 0$ の種数が 2 以上であれば, $f(a, b) = 0$ を満たす有理数の組 (a, b) は有限個である.

※ **種数**とは, 方程式 $f(x, y) = 0$ の複素数解 $(x, y) = (x_1 + ix_2, y_1 + iy_2)$ ($x_i, y_i \in \mathbb{R}$) が作り出す, 実 4 次元空間の曲面内の穴の個数.

例 $f(x, y) = x^n + y^n - 1$ ($n \geq 4$) の種数は 2 以上

→ 「Fermat の最終定理」への応用

【補足】 K_ε が計算可能な形で abc 予想が証明されると, 可能な有理数の組の範囲が分かる. これは Faltings の手法では得られない.

§2.6 応用：数論的力学系

数論的力学系では、例えば、有理数 α の有理関数 $\phi(x)$ による軌道

$$\mathcal{O}_\phi(\alpha) = \{\alpha, \phi(\alpha), \phi^{(2)}(\alpha), \phi^{(3)}(\alpha), \dots\}$$

(ただし、 $\phi^{(n)}$ は ϕ を n 回合成した関数) の数論的性質を研究する。

定理 9 (Gratton-Nguyen-Tucker, 2013)

$\phi(x) = p(x)/q(x)$ (既約分数) が次の 2 条件を満たすとする。

- (i) $\phi(x)$ は cx^d の形ではなく、 $\max\{\deg p, \deg q\} \geq 2$
- (ii) $\mathcal{O}_\phi(\alpha)$ は無限集合

abc 予想が正しいならば、数列 $\{\phi^{(n)}(\alpha)$ の既約分数表示の分母 $\}_{n=1}^{\infty}$ には、有限項を除いて原始的素因数が存在する。

※ 数列 $\{a_n\}$ において、 a_n の**原始的素因数**とは、 a_n の素因数であって、それより前の項の素因数ではないもの

§2.7 応用：その他

他にも様々な応用が知られている。

例えば、次を参照：

Nitaj, The abc conjecture home page
(<https://nitaj.users.lmno.cnrs.fr/abc.html>)

2022 年 10 月 15 日現在では、32 個の応用が掲載されている。
ただし、代数体上の abc 予想などの応用も含む。

§3 abc 予想の起源

疑問

Oesterlé と Masser は、abc 予想をどうやって思いついたか？

Baker と Wüstholz によると

「この予想は最初オステルレ (Oesterlé) により、このような ε が存在するかもしれないという弱い形で述べられ、続いてマッサーにより精密化された上記の形として予想された。オステルレの動機はもともと楕円曲線についてのスピロ (Szpiro) の予想にあり、またマッサーは対数 1 次形式を用いた関数体上での *abc*-予想のメイソン (Mason) による解決から精密化のヒントを得たとされている。」

(『数学の最先端 21 世紀への挑戦 第 5 巻』11–12 ページから引用)

Szpiro 予想

有理数体 \mathbb{Q} 上の楕円曲線 E に対して, その重要な不変量である
「極小判別式 Δ_E 」と「導手 f_E 」の関係を述べた予想.

予想 5 (Szpiro, 1980 年代)

ε を任意の正数とする. \mathbb{Q} 上定義された全ての楕円曲線 E に対して

$$|\Delta_E| < K_\varepsilon f_E^{6(1+\varepsilon)} \quad (3)$$

が成り立つような定数 $K_\varepsilon \geq 1$ が存在する.

【abc 予想との関連 (概略)】 abc-triple (a, b, c) に対して,
楕円曲線 $E : y^2 = x(x-a)(x+b)$ を考える. 条件「 $a \equiv -1 \pmod{4}$,
 $b \equiv 0 \pmod{16}$ 」の下では $\Delta_E = \left(\frac{abc}{2}\right)^2$, $f_E = \text{rad}\left(\frac{abc}{16}\right)$ であり,
(3) は $(abc)^{1/3} < K'_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$ (ただし, $K'_\varepsilon > 0$) の形に書ける.
 $(abc)^{1/3} \leq c$ より, abc 予想から, この E に対しては (3) が成り立つ.

Szpiro 予想は, $1728\Delta_E = c_4^3 - c_6^2$ (c_4, c_6 は E のよく知られた不変量) と書けることを利用して, 次の強い予想に修正できる.

予想 6 (強い Szpiro 予想)

ε を任意の正数とする. 全ての \mathbb{Q} 上の楕円曲線 E に対して

$$\max\{|c_4|^3, |c_6|^2\} < K_\varepsilon f_E^{6(1+\varepsilon)}$$

が成り立つような定数 $K_\varepsilon \geq 1$ が存在する.

【事実】

- 「abc 予想」 \Rightarrow 「Szpiro 予想」
- 「Szpiro 予想」 \Rightarrow 「弱い abc 予想 : $c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{\frac{6}{5}+\varepsilon}$ 」
- 「強い Szpiro 予想」 \Leftrightarrow 「abc 予想」

Mason-Stothers の定理

定理 10 (多項式版「abc 定理」 (Stothers, 1981; Mason, 1984))

定数でない複素数係数 1 変数多項式 $a(t), b(t), c(t)$ が互いに素であり,
 $a(t) + b(t) = c(t)$ を満たすならば

$$\max\{\deg a, \deg b, \deg c\} < \deg \text{rad}(abc) \quad (4)$$

が成り立つ. ただし, 多項式 $f(t)$ に対して $\text{rad}(f) = \prod_{\alpha: f \text{ の零点}} (t - \alpha)$ とおく.

「整数」と「多項式」の対応

「整数」	↔	「多項式」
$\log a $	↔	$\deg a$
素数	↔	1 次式

を考えると,

不等式 (4) は, 整数の世界では, abc-triple (a, b, c) に対して

$$\log c < \log \text{rad}(abc) \quad \text{i.e.} \quad c < \text{rad}(abc)$$

が成り立つことに対応する. (実際はそのままでは成り立たないが…)

その他の整数と多項式の類似例：

定理 11 (多項式版「Fermat の最終定理」 (Liouville, 1879))

n を 3 以上の整数とする.

定数ではない複素数係数 1 変数多項式 $x(t), y(t), z(t)$ で

$$x(t)^n + y(t)^n = z(t)^n$$

を満たすものは存在しない.

【補足 1】 定理 10 と定理 11 は、高校数学程度の知識で、それぞれを直接示すことも可能. また定理 10 を認めれば、定理 11 は直ちに得られる.

【補足 2】 abc 予想の他の類似物：

複素関数の値分布理論である「Nevanlinna 理論」の第二主要定理 (1925 年に証明されている)

§4 知られている事実

望月 (2021) 以前

定理 12 (Stewart–Yu, 2001)

全ての abc-triple (a, b, c) に対して

$$c \leq e^{\kappa N^{1/3}(\log N)^3} \quad (\text{ただし, } N = \text{rad}(abc))$$

が成り立つような定数 $\kappa > 0$ が存在する。

下からの評価：

定理 13 (Stewart-Tijdeman, 1986)

 $\delta > 0$ とする。次を満たす abc-triple は無限に存在する：

$$c > N \exp\left(\left(4 - \delta\right) \frac{\sqrt{\log N}}{\log \log N}\right).$$

※ abc 予想： $c < K_\varepsilon N^{1+\varepsilon} = K_\varepsilon N \exp(\varepsilon \log N)$

望月 (2021) 以後

定理 14 (abc 予想 (Mochizuki, 2021))

ε を任意の正数とする. このとき, 全ての abc-triple に対して

$$c < K_\varepsilon \{\text{rad}(abc)\}^{1+\varepsilon}$$

が成り立つような定数 $K_\varepsilon \geq 1$ が存在する.

定理 15 (Mochizuki-Fesenko-Hoshi-Minamide-Porowski, 2022)

$0 < \varepsilon \leq 1$ とする. このとき, 全ての abc-triple に対して

$$\begin{aligned} c &\leq 2^{\frac{5}{2}} \max \left\{ \exp(8.5 \times 10^{29} \times \varepsilon^{-166/81}), \{\text{rad}(abc)\}^{\frac{3}{2}(1+\varepsilon)} \right\} \\ &\leq 2^{\frac{5}{2}} \exp(8.5 \times 10^{29} \times \varepsilon^{-166/81}) \{\text{rad}(abc)\}^{\frac{3}{2}(1+\varepsilon)} \end{aligned}$$

が成り立つ.

→ 「Fermat の最終定理」の新証明, 「一般化 Fermat 方程式」への応用

§5 abc 予想の改良

予想 7 (強い abc 予想 (Robert-Stewart-Tenenbaum, 2014))

全ての abc-triple (a, b, c) が

$$c < N \exp \left(4 \sqrt{\frac{3 \log N}{\log \log N}} \left(1 + \frac{\log \log \log N}{2 \log N} + \frac{C_1}{\log \log N} \right) \right)$$

を満たすような実数 C_1 が存在する. ただし, $N = \text{rad}(abc)$ とする.

※ abc 予想: $c < K_\varepsilon N^{1+\varepsilon} = K_\varepsilon N \exp(\varepsilon \log N)$

更に, Robert-Stewart-Tenenbaum は, 同じ論文で次も予想している:
無限個の abc-triple (a, b, c) が

$$c > N \exp \left(4 \sqrt{\frac{3 \log N}{\log \log N}} \left(1 + \frac{\log \log \log N}{2 \log N} + \frac{C_2}{\log \log N} \right) \right)$$

を満たすような実数 C_2 が存在する.

予想 8 (明示的 abc 予想 (Baker, 2004))

abc-triple (a, b, c) は, $N := \text{rad}(abc) > 2$ のとき¹,

$$c < \frac{6}{5} \frac{N(\log N)^\omega}{\omega!}$$

を満たす. ただし, ω は $N = \text{rad}(abc)$ の素因数の個数である.

この予想から, 予想 2(abc 予想 (簡潔版)) が従うことは, 簡単な計算によって分かるが, 更に深い事実が証明できる:

定理 16

予想 8 の下で, 任意の abc-triple (a, b, c) に対して, 以下が成り立つ:

- (1) $c < \{\text{rad}(abc)\}^{1.7}$ (Chim-Nair-Shorey, 2018)
- (2) $c < 32\{\text{rad}(abc)\}^{1.6}$ (Chim-Shorey-Sinha, 2019)

¹ $N \leq 2 \Leftrightarrow (a, b, c) = (1, 1, 2)$. このとき, 右辺は $1.663 \dots$ で不成立.

まとめ

abc 予想 : 「かけ算」と「たし算」の間にある奥深い規則性を定式化したもの

広範囲にわたる応用 : Fermat の最終定理, Siegel の定理 (S -単数の方程式), Erdős-Mollin-Walsh 予想 (多冪数), Roth の定理 (代数的無理数の近似), Faltings の定理 (有理数解の有限性), 数論的力学 (原始素数の無限性) など

起源 : 楕円曲線に関する Szpiro 予想,
abc 予想の多項式類似である Mason-Stothers の定理

知られている事実 : Mochizuki(2021) により abc 予想は証明済み.
Mochizuki 等 (2022) により $K_\varepsilon(\varepsilon > 0.5)$ を具体的に評価.

改良 Robert-Stewart-Tenenbaum(2014) により, より精密な予想が提出.
Baker(2004) による明示的な予想もあり.

参考文献 (読書案内)

スライドを作成する上で、頻繁に参考にしたもの：

- 安福悠, 『発見・予想を積み重ねる — それが整数論』, オーム社
- せきゅーん, INTEGERS, <https://integers.hatenablog.com/>

本講演より内容が平易なもの：

- 小山信也, 『日本一わかりやすい ABC 予想』, ビジネス教育出版社

Szpiro 予想や多項式版 abc 定理について解説が詳しいもの：

- 黒川信重・小山信也, 『ABC 予想入門』, PHP 研究所